

琉球大学と仲宗根先生

湧上, 元雄 / WAKUGAMI, Motoo

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002657>

琉球大学と仲宗根先生

湧上 元雄

琉球大学が米国民政府の監督下のいわゆる布令大学として、首里城の廃墟の中から呱呱の声をあげたのは、昭和二十五年（一九五〇）である。そして文教学科から引続いて国漢文を担当しておられたのが、中村龍人先生であった。同二十七年、文理学部国文学科が設置され、沖縄群島政府の解散にもない、文教副部長の仲宗根政善先生と編修官だった嘉味田宗栄先生が赴任してこられた。

二十九年、県立二中で一期先輩の中今信さんと私が同時採用。二中切つての秀才で、文教学科教官の経歴をもつ中今さんには問題なかったが、当時普天間高校教頭の比嘉龜盛先生は学校長の反対で一年遅れることになり、結局、アメリカの大学方式の理事会の意向で、私にお鉢が廻って来て、仲宗根先生が初対面の私を松川のご自宅に呼ばれて、学士号の証書を確認されただけで、採用が決った。というのも、あのころは履歴詐称の事件が多かったからである。

私は、昭和十七年（一九四二）の国学院大学の十月繰り上げ卒業で、在学中はほとんど学業を放擲しておきながら、退学のふんぎりもつかないまゝ、卒論主査の折口信夫先生のお情で卒業させて頂い

たのに、あえて知念高校から琉大に転職を決意させたのは、高校での教務管理に自信を失ったからだだった。

家内から一ヶ年の単身赴任の同意を得て、早速、首里赤田御門（継世門）下の民家に間借りしての自炊生活で、週十六時間の講義の下調べで、一夜漬けの勉強がしばしば夜明けに及んだ。受講の学生諸君こそいい迷惑だったに違いないが、私にとってもっとも精神の高揚した時期だったのである。しかしそれも束の間、三ヶ月で家に呼び戻され、草深い知念半島の玉城村から、片道二時間かけて通勤する破目になった。

昭和三十年、胡屋朝賞学長の辞任に伴う学長選挙で、安里源秀副学長と図書館長の仲宗根先生が三次投票で一騎打ちということになり、先生はひどく迷惑そうにしておられたが、一点差で次点。そのため副学長に任命されてしまった。

翌三十一年八月、軍用地問題での島ぐるみ闘争のデモに琉大学生会も参加した時、出陣式に臨んで、安里学長はわざわざシグザグ行進とヤンキー・ゴーホームの連呼をするなど訓辞して送り出した。

たまたま、私が図書館四階にある教官室の窓から眺めていると、行動隊長の喜舎場朝順君が入って来たので、「君たちはまるで赤穂浪士の討ち入りの心境だね」というと、そんな深刻なことではない、あと五年で革新の天下になりますよとの明るい返事が返って来た。結局、琉大デモ隊は、先行していた県出身の本土留学生のデモに煽られ、学長の約束を破ってしまったという。

そしてビートル―民政副長官の強硬方針により、処分を受けた学生六名のうち四名も国文学科から出ずに到った。

そしてその善後策は、学生対策の総責任者である副学長の仲宗根先生の双肩にかかってしまい、先生は隠密裡に本土の文部省関係や私立大学連盟の学長方と接衝を重ねて、各大学に四名の学生を編入させた。

事後処理も一段落した三十二年四月、「琉球方言研究クラブ」発足。さらに副学長を退任された翌三十二年十二月には、機関誌『琉球方言』が創刊されて、中本正智君の「奥武方言動詞の活用」も掲載、日曜毎にお宅に押しかけるクラブ員たちを相手に、音声表記の指導訓練に明け暮れることもあったという。

さらにハワイ東西文化センターから帰られた三十九年より、お宅を会場とする「おもろ研究会」の例会も、毎週金曜日に開かれ、若い琉球文学の研究者を育てられた。

三十六年、私は内地留学で前期は京都大学で野間光辰先生の西鶴の講義を受講、後期を母校の国学院で過ごした。ところで角川書店の角川源義社長は、大学での一期先輩で柳田国男、折口信夫両先生の愛弟子、沖縄にはことの外、関心が深かった。私を何とか一人前の学者に仕立てようとしていろいろ配慮してくれ、荻窪の邸に呼んではご馳走してくれるのだった。

たまたま、外間守善さんが、仲原善忠先生と協力して、『おもろさうし』の校本、辞典、総索引の

編集を進めていると話すと、彼は電話をかけ外間さんに来て貰い、角川から出版したいと申し出た。のち校本の写真版でコストが掛り過ぎると社内でもめた時、角川さんのポケットマネーで埋め合せたという。彼は昭和三十五年に来島した時、私を同道して仲宗根先生のお宅に訪れ、是非ご本を出して下さいと申し出た。それが二十年目に実現した、先生の畢生のライフワーク、『沖縄今帰仁方言辞典』だったのである。

その頃、外間さんは琉大に行ってもよいともらしたので、仲宗根先生に取り次いだところ、ことの外喜ばれて、三十八年に外間さんの着任が実現した。

たまたま私が単身赴任の彼の下宿先に訪れると、「おもろ」の辞典作りに身心を磨りへらしての過労から、まるで苦行僧のような雰囲気にはすっかり圧倒されてしまった。

二年後、帰京されて和洋女子大を経て、仲原善忠先生の教子の中村哲総長のおられる法政大学に轉じられて、今日の基礎は築かれたのである。そして琉大国文科の卒業生が外間さんを頼って、続々大学院を目指すようになり、学内に沖縄文化研究所も付置された。私が広末保先生にご挨拶に上ると、「法政の大学院は琉大出身者のためだけあるのでは無いですがね」と苦笑いされた。多分、ご専攻の近世文学への志願者が少ないことを嘆かれたのであろう。

当時、仲宗根先生のお弟子の名嘉順一、比嘉政夫、中本正智の三君は、東大の服部研究の研究生であった。中本君が私の止宿先に来て、国学院の大学院に進みたいと話した。

そこで非常勤講師として来学中の都立大の平山輝男教授にご相談すると、ここでは話が出来ないからと、私を目黒のお宅に呼んで、「中本君の身柄は自分が引受けるから、国学院は受けさせるな」とのご託宣。幸わい中本君も喜んで承知してくれた。『琉球方言』で好論文を発表し、仲宗根先生の下で音声記号による音声表記の訓練を受けた彼の才能に、平山先生は属目されたからに違いない。

中本君に続いて、方言クラブの後輩たちも進学して、仲宗根方言学の名を高からしめた。彼は平山、大島両教授のあとを継いで教授に昇進し、講義に著述、調査にとまさに八面六臂の大活躍で、学風もとみに円熟の域に達した矢先、不幸病魔の冒すところとなり、平成六年二月、多くの人々に惜まれてついに帰らぬ人となった。

一方、比嘉政夫君も、中本君と同じ三十七年に都立大の大学院の社会人類学科に進み、琉大に赴任してからは、私たちの民俗研究クラブの顧問として活躍して貰った。そして沖縄民俗学会の二代目会長の時、乞われて国立歴史民俗博物館教授に転じて、今年フランス留学より帰任して、中央学界での飛躍が期待される。

琉大国語国文学科の悩みの種は、近代文学の専任の不在であった。

仲宗根先生は、かねてより二期目の卒業生の、教育大で先生同期の吉田精一教授の指導を受けて、修士課程を終えた岡本恵徳さんに目をつけておられた。そこで学会出席で上京する私に、会ってくるように言われたのである。彼は中央線沿線の日野市に住んでいたので、荻窪駅隣の喫茶店で落ち合

うことになった。折角、都内で有名校の城南高校に勤務していた彼は、私の申し出に困惑したようだが、翌四十一年、琉大に赴任して貰い、学科は画竜点睛の思いをした。

五十年、琉大では停年制が施行されて、仲宗根、中村、嘉味田、比嘉の諸先生が退官され、独り自分だけ取り残された思いがしたが、学科では岡本、池宮正治、上里賢一、仲程昌徳、玉城政美のメンバーに、国立国語研究所の上村幸雄教授、大学後輩の関根賢司さんが東京より赴任されて、一挙に四十代、三十代の鮮やかな陣容に変わった。そして五十七年、私も定年退職を迎えた。曲りなりにも二十八年間も大学におれたのは、「寛仁ニシテ人ヲ愛ス」仲宗根先生を上司に持てたからだった。

『今帰仁方言辞典』が刊行された五十八年、珍しく先生は私に愚痴をこぼされた。「科研費を返上しても、もっと辞典を補筆、推敲すべきだった」と。文部省の科研費の期限に間に合わすために、無理に無理を重ねてすっかり体調をくずされたのである。

平成四年夏、先生が長期入院先の病院より戻られたと聞き、安里の大浜病院に入院中の家内の介護の合間をみて、松川のお宅に伺った。長女のおりえさんたちに看取られながら、寝台に横臥されている先生の傍に思わず駆け寄ると、発声もお出来なれないのに、満面の笑みを浮かべながら、差し出した私の手を強く握り返された。私はあの釈迦涅槃像のイメージにダブらせながら、光り輝くような心の安らぎが見られる横顔を見詰めたのだった。

先生は沖繩戦の凄惨な地獄から奇跡的に生還され、散華した姫百合の乙女たちの鎮魂を願いつつ、

琉球大学の創建に、若い学徒の指導育成に、また沖縄の反戦平和の象徴として、平和運動に精根を傾け盡されて、まさに命終に臨もうとするお姿は、禅定に達した尊者の佛さえ偲ばれた。それから三年、平成七年二月十四日、その波瀾に満ちた尊き生涯を閉じられた。

合 掌